



本部物流センター
販売促進部部長 秋津 裕哉さん

株式会社サカモテクノ
取締役会長 田畑 輝澄さん

本部物流センター
販売促進部部長 田畑 晃一さん

日本一からオンリーワンへ

サカモテクノは、自転車フレーム(車体)のメーカーとして2000年に年間148万台を生産し、日本一にまでなった企業です。しかし、その後は得意先の相次ぐ閉鎖により、サカモテクノ自身も倒産寸前に追い込まれたとのこと。日本と中国をあわせて300人ほどいた社員も、わずか4名にまで減少しました。

「やはりものづくりは楽しい。ものづくりの原点は他にはないものをつくること」

ところが、そういった状況であるにもかかわらず、サカモテクノの社風や日本一の技術にひかれ、外部から優秀な人材が数多く集まり、2005年に完成車のメーカーへと転業。そこからユニークな自転車と、たくさんの人に求められる自転車を製造し、現在は、テレビや新聞などのメディアからも注目を集めるほどに。見事な復活劇の裏にあるのは、他にはないものをつくるという、ものづくりの原点。今回はそのこだわりやものづくりへの想いを伺いました。

完成車メーカーへの転業はスムーズに行われたのでしょうか？

田畑会長：やはり当社にはフレームメーカーとしての実績と技術があったので、お金と人材が揃えば、再生できる自信はありました。当社の従業員数が4人となった時に入社したのが秋津です。彼はもともと大手の自転車メーカーで豊富なノウハウを持っており、そこから当社の復活劇もはじまりました。

社員4人という状況。そこに飛び込まれた理由を教えてください。

秋津さん：以前の会社では営業と企画をやっていました。転職に際してはやはり自転車をつくること、販売することが好きという想いも強く、同じ働くなら気持ちよく働ける環境を、と考えていました。自分のつくりたい自転車をつくる。そんな自由度が重要であり、かつ応援してもらえる社風と考えた時に、サカモテクノがぴったりで、ここしかないという気持ちで選びましたね。

一度縮小した規模をあらためて拡大するのも大変だったのでは？

田畑さん：私

はその一時期4人になった時のメンバーのひとりだったのですが、完成車メーカーとなるために、中国のほうで製造や技術面での溶接ロボットの使い方の指導に奔走しました。その後は関東で市場開拓も手掛けましたが、現在は企画や図面作成の仕事をしています。

企画される際に軸となるのはどのような考えですか？

秋津さん：ユニークな自転車は注目を集めやすいのですが、やはり企業としての存続、発展を考えた際には販売力のある自転車、よりニーズの強い自転車を企画し、販売していかなければなりません。そういった意味では企画の軸となるのは、どうやったら購入してもらえるのか、どうやったら支持を集めるのか。そういったことを日々考えています。購入される方にとって利便性のあるもの。それが結果として人気の集める自転車となります。もちろん見た目にかっこいい自転車であることも大事です。

何でも好きなものを考えるというわけにはいかないんですね。

田畑さん：ただ、企画段階でこういう自転車だと売れるのではないが、売上に貢献するのではないかと考えたこと、自分で思い描いた自転車を企画してつくることのできる点、その点ではものづくりの楽しさは十分にありますが、ニーズは多様化していますし、自分で新しいパターンを次から次へと出すことができれば企画としてのやりがいを実感することができます。

秋津さん：やはりものづくりって楽しいものです。自分の考えた商品が全国で乗られている。たまに外出していても



自分のつくった自転車を街で見かけるんです。すごくうれしいですね。世にカタチとして残るのが最大の喜びではないでしょうか。

日本語の商品名を持つ自転車もありますが、それはやはり世界を見据えていますか？

田畑：このまま事業として順調に発展していけば、いずれは世界という考えもありますが、まずは国内でもっとメジャーな完成車メーカーになることが大事ですね。復活の要因となった、他にはないものをつくるという、ものづくりの原点をしっかりと見つめて。それはデザインだけでなく、機能面や商品スペックでもそう。日本語の商品名もそのひとつ。日本のメーカーですから、ものづくりにこだわりを持って、日本独特のものをつくっていかなければならないですね。



若い力がものづくりの現場を支える。 吉田 浩之さん 榮 孝史さん

完成車メーカーとして、現在は製造の大部分を中国の工場で行うようになったサカモテクノですが、やはりものづくりの企業として、品質のチェックも兼ねて、各種パーツの取り付けなど、組み立て作業は自社の物流センターで行っています。実際に企画したものが図面通りにできているか、組み立てることができるか。伝えた技術が実践されているかを確認する場面。ここではそんなものづくりの大切な現場を支える若い社員の方にお話しをお聞きしました。

自転車づくりのやりがいを教えてください。

吉田：やはり当社の場合は、他にはない独自性の強い自転車が多いですから、それを自分で組み立てることができるというだけでもやりがいや楽しさがあります。

やはり自転車が好きで入社されたのでしょうか。

吉田：入社動機はそれだけではないのですが、以前は物流業界にいて、ものの流れると

ころを見ることはできたのですが、やはりものがつくれる、できる場所を見たいという想いがあり、その中でも、自社の自転車を手掛けているサカモテクノに魅力を感じましたね。

社風に何か特徴はありますか？

榮：やはりアットホームな社風があげられますね。それが魅力でもあります。また、ものづくりの会社らしく、アイデアが思いついたら誰もが発言することができますし、可能な範囲で好きなこともやらせて

もらうことができる環境ですよ。

独自のルールがあれば教えてください。

榮：何でも積極的に取り組まないといけない、というところでしょうか。会長もすごくアグレッシブな方で、社員を応援してくれる会社ですので、むしろ遠慮したらダメですね。ものづくりは、自分が大きくかかわるほうが楽しいですよ。



自転車の組み立てにチャレンジ。 体験レポート いわさき

自転車に求められるものはデザインのかっこよさ、使いやすさ、軽さなどたくさんありますが、完成車メーカーとしてはやはり安全面が非常に重要。特にブレーキの組み立ては慎重に、間違いなく行わなければなりません。



まずはチェーンの取り付けから。かなりの力と、はめ込むためのコツが必要です。無理やりはめようとしても上手くいきません。



後輪に付いているブレーキをフレームに固定して取り付け。これが甘い動きをしっかりと止めることができません。



そして、変速機能の取り付けです。取り付けと同時に不良品でないかを確認。この工程であらためて安全の大切さを知りました。

子どもの頃から慣れ親しんでいる自転車ですが、いま思えば走ることばかりに目が行ってました。今回の体験から、安全面にもしっかりと技術が使われていることを知って、自転車に対する考え方も少し変わったような気がします。

“動”のために集約された技術は、金属に新たな可能性をもたらす。

～ハードロック工業・株式会社タナベ編～

金属は、“ものが動く”“ものを動かす”ために欠かせないものです。しかも、それは技術によって可能性までも大きく変化させるため、職人たちは日々努力や工夫を重ねなければなりません。今回は、そんな“動”のために技術力を高め、他にはない存在として注目を集める企業をご紹介します。



絶対を実現する技術。その存在は世の中に不可欠となった。

ハードロック工業株式会社
大阪府東大阪市川俣1-6-24
従業員数:45名

緩まないナット「ハードロックナット」の開発により、現在ではものづくり、工業の町と言われる東大阪を代表する企業となった同社。一度締めると絶対に緩まない、その技術は新幹線をはじめとする動くものから、明石海峡大橋といった非常に耐久性の必要とされる建造物にまで欠かすことのできないものとして認知されています。現在では、ボプスレー日本代表のボプスレーのランナー(ソリの刃)締結箇所にも用いられるなど、その展開は特に知られることがありません。



培ってきた技術と妥協なき姿勢が絶対的安全を実現する。

株式会社タナベ
従業員数:120名
大阪府箕面市小野原東1-4-15

タナベは、マフラー、サスペンションといったチューニング用パーツを製造するメーカー。その技術は、実際のモータースポーツ活動で培ってきたことと。特にサスペンション製品「サステック」は、その集大成とも言えるもの。ISOの認証を受けた日本国内の工場にて、部品ひとつから徹底した品質管理を実施し、開発・製造・組立を一貫して行います。この妥協なき姿勢が、絶対的安全を実現する製品を生み出すとのことです。